



## 私の青春半期終了時点にて

増田 浩 司\*

私、年若干23才 取り立てて書くような特別な経験も有りませんが、未だ未だ青春の真最中の私の青春半期終了時点にてと題しまして、学生々活の事を中心に書いてみたいと思います。多くの阪大院生と私の異なる処がある。それは私が他大学から、当大学院へ入学した事である。昭和47年地元愛媛大学土木工学科に入学した。当大学は人ぞ知る子規の春や昔十五万石の城下哉の松山城の北側に位置し、周囲には、松山商大他高校中学小学と愛媛教育界のメッカ、その名も文京町。週辺は静かな環境を保っている。又城山の南側には各官庁、商店街、東に坊ちゃんゆかりの道後温泉があり、それらはみんな徒歩の距離にあり、大学と繁華街とは城山が遮蔽の役割をしている。勉学に適した環境と、パチンコ、飲や、温泉とこれ又大学生々活に欠かせない(?)施設が私達の遊び心をくすぐらすにはおこななかった。学生が泣いて喜ぶ愛大。となりましょうか。私も例にもれずこれらをフルに活用したのである。

思うに大学入学当時は勉学に燃え模範生を印で捺した様な生活だったが俗にいう五月病とやらで、後期が始まる頃には私の学生々活の転換が始まった。タバコ、麻雀、パチンコ、酒と勉強は後廻わして、意志を共通するもの即ちここでは(悪友と呼ぶ)と供に、「若い頃は経験也。何事も実践から始まるんだ」と解かったような事を云い乍ら冒険心を燃やして未知なる物への挑戦を始めた。大した事は出来なかったが、未知なる物への経験は一ツツ我が青春の頁を快よく充たしてくれた。

一回生も終りの頃、とある古本屋で見つけた吉川英治の初版「宮本武蔵」十一巻。予ねてか

ら興味を抱いていた本だけに嬉しかった。相当古びて表紙はボロボロ、赤茶けた頁の匂い流石時代を感じさせた。どちらかと云えば私はあまり文庫本は好まないのだが、何故かこの本に惹かれ、通読する事三回。それ以来宮本武蔵が私の理想像となったのである。単純な動機だけど若者は感動する事から始まると、今でも私は信じているから。この本は私のその頃の人生観に少なからず影響を及ぼしたようだ。その結果実際に武蔵の足跡を歩いて追ってみようと、岡山県は宮本村を振り出しに一カ月の旅に出た。その昔を忍び乍ら寺民家或は星を仰いで。紀行の思い出を書けば用紙十枚位は楽に埋まるであろう。この旅が青春時代の忘れ得ぬ思い出の一ツとして心深く刻まれた事と云っておきたい。

扱、肝心の大学生活だが講義はサボりがちで時たま出席すれば居眠りをしていたようだった。そんな事だから試験前ともなればノートあさりに忙がしい筈なのにいよいよ前日になって、事すでに茲に至りで、悪友達が集まって対策を練ったりしたものだった。しかし私にとって試験は一種のゲームの様な存在で、そんな事をし乍らも何故か単位は順等に取得し、二回生後期からは教養部り別れを告げ、少こしはなれた工学部校舎へ移った。

学生食堂は、工学部前と教養部の方とにあるが、我優秀なる(?)工学部学生諸子は、ワザワザ教養部の方へ行ったものだ。目的は勿論女性にある。もとより女性を抜きにして青春を語り得ない。私は男子高校から、これ又どう考えても、女性とは程遠い全く色気なしの土木工学科に席をおいたのだから、今更後悔しない事にしよう。

だが、しかし、私が女性と授業を共にしたのは、にきび華やかなりし中学が最後だったのだから、その淋しさたるや、物足りなさたるや、

\* 増田浩司 (Kouzi MASUDA), 大阪大学 大学院 工学研究科土木工学専攻, 樫木研究室(内線4918) 前期課程2年次

心ある諸子には解かって嬉しいのである。

ここ愛媛大学は美人の宝庫(?)せめてと心ひそかに思いを寄せる女性は「こちらにだって選ぶ権利はあるのよ」とばかりにヒヂ鉄。そっと通りすぎたい女性は「おしたいしてます」とばかりに……。 「男尊女卑!」「女が何だ!」と強がり云っては、又良き友と夜を徹して酒を付合ったものだった。でも幸運の女神は見離さなかった。私が三回生になった春の頃理想の彼女とめぐり逢わせてくれた。「妻をめとらば才たけて見目うるわしく情あり」。私の最も愛すべき唄の中の一つの通り……。彼女について語るのはこれ位にしておこう。兎に角私が最も大学生々活を謳歌したのはその頃からだった。充日した毎日だった。楽しかった学生祭。語り明かした下宿。様々な思い出を胸に秘め4年生になり、そろそろ就職の事を考える様になった頃社会状況の悪化で就職状況も最悪をきわめていた。国家公務員試験の一次が終った頃阪大の大学院を受ける決心をした。勉強したい気持もさる事乍ら旧帝大への憧れが強かった。早速先輩に問題集等を送ってもらった。頁をめくる毎に驚歎と不安が増々色濃くなって今迄サボっていた私にとってこの難問が解ける筈がありません。最も科目によっては講義の内容もかなり異っているようだった。友人達も私の不合格はとっくに見分けているようだった。実際私自身、そんな気持だった。それより又一つの目標が出来た事。一カ月間全力投球で体当たり、発表当日掲示板の前で親友と手を取り合って思わず歓声をあげた憧れの阪大院生になれるのだ。こうして第一の関門は通過した。次に待つのが卒論研究だ、木工研究室で1スパンの部屋に同僚5人各々机をもらって研究体制が整った時初めて大学生の実感がわいてきた様な気がした。一生懸命やった最終段階に入った頃は徹夜の連続で頼むは体力のみ、出来た!初めて自分で作成したプログラムの計算結果と測定値を比較する時、新たな興奮を覚えた。卒論と云う大難関を克服した喜びが私の大学生活のすばらしい終止符にもなった。

学部生活の事に紙面を使いすぎたが、最後に私の感じた大阪大学について書いておきたい。初めて阪大工学部に足を踏み入れた時抱いていたイメージとはあまりにもかけ離れていた。灰色一色の打ちっぱなしコンクリートの林と云うのが私の第一印象であった。学生にとって「勉強するしかない所」と云った感じを受けた。入学してからやがて1年半になりますが愛媛大学と比べて学生達の活気のなさを痛感している。しかし阪大生を評して人は云う「おとなしくてよく勉強する」と私もその感を禁じ得ない。当大学院に入学してそこに溶け込むには少々時間が要った。対人関係については元来外面的な性格の私には苦もなく同僚と解け合う事が出来たのだが、研究室内のシステムが前大学とかなり異っていたからである。現在の研究室では一つの研究テーマグループが大体、四回生、M1、M2、と助手以上で構成しM2の修士論文を中心として研究活動をするとういしくみである。M1から入った私は卒論とは異った全く新しいテーマに取り組んだ為此の一年はミッチリ勉強しようと計画していたが、最初からM2の云われるままの手伝いばかりで少々憤慨した事もあった。特に私は他から拘束される事を好まない為それがグループ研究の妨げになった。

後になったが、ここで我が榎木研について紹介しておこう。榎木教授を筆頭に、四回生迄総勢十七名は、日夜海岸工学に関する研究に励んでいる。特色はギャンブル好きが揃っている事である。少なくとも我が榎木研は、先に書いた私の阪大生イメージの限りではないようである。

現在、私はM2で指導する立場にあるが、常に人間関係を念頭において研究活動に励んでいます。兎に角与えられた課題はやり遂げねばならない。四回生諸君! 共に頑張ろう。残る処半年余り、学生々活の素晴らしい終止符を打つべく私は努力を惜しまないだろう。

頭に浮かぶにまかせて、とりとめもない事を書きましたがこのあたりでペンを置きます。

昭和五十二年八月十一日

宇和島にて。